
Deus Ex Machina

マシーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deus Ex Machina

【Nコード】

N3144Z

【作者名】

マシーン

【あらすじ】

二千二十年、世界中ではまだ魔法という存在は認知されていなかった。

日本のとある兄妹は、とある事情から、魔法という存在を扱う、魔法使いを育成する為に作られた学校へと編入することとなった。

――真は、百合とり何気ない日常を守る為、そして力へと渴望を。

――百合は、真との当たり前のすこしえっちな日々を続ける為、

そして神を殺す為に。

一話 少年少女の憂鬱（前書き）

貴方とはこれで始めまして、になるのかな？

なら貴方は知っておかなければならない、ここがどんな場所であるか――

そう、ここは表舞台の反対側、まだ語られる必要のない不要な物語の断片

ここには沢山のシナリオが容易されている

ここにはたった一つの未来が映し出されている

ここには多くの結末が容易されている

だからここは表には出ないし、出さない

理由はまだ教えられないよ

まだ、ね

じゃ、ばいばい――

一話 少年少女の憂鬱

世界には未来というものがある。

人々、ひいては動物達はそれを瞳^めで見るとは出来ないし、それを頭で知ることは出来ない。

何故なら、未来なんてものは絶対的不確定なものであるからだ。未来、それは現在^{いま}の連続である。

例え話をしよう、仮に人物Aが”これから腕を振る”、という事柄を絶対的に発生する未来だと言い張るとする、これは確定的未来だといえるだろうか。

否、そこにはifの条件として、銃で撃たれる、突然の発作で倒れる等の突発的事柄でその未来はなくなってしまうのだ。故に、未来は絶対的などではなく、不確定で未知なものなのである。

もう一つ、”俺が未来を変えてやる”なんてことは出来ないのである。

何故なら、”その未来を変えろという未来”なのであるのだから。つまり、何が言いたいのかという事。

——未来なんてのは、あまり深く考えないのが一番だということだ。

人は、自分が時間を持って余しているということがあまり好きではない。

それは人間が何かしら”何かをしなければ”という意識を少なからず持つているからだ。

家事を残している者、仕事が残っている者、人にはそれぞれくつかやらなければいけないことがあるのだ、無論、生きるということもまた、それに当てはまるのかもしれない。

まぐるー一とは言いすぎだが、人は極端に暇だというのは嫌がる。そう、結局何が言いたいのかというところ――

「つまらない」

少女は憤慨しながら言う。

「我慢してくれ」

少年はその問いが何度目か等と思いつながら適当に言う返す。

そう、この「つまらない」という台詞はもはや両の指では数え切れない程の数になっていた。

だから少女は言う、

「だから、何かしてっ」

「無茶を言うな」

――暇な時間が出来た用に何かしら、準備をしておけということだ。

突如として投げかけられた情け容赦のない理不尽な要求に、少年は辟易した様子で応える。

少女は、少年が何もしてはくれないと分かったのか、つまらなさそうにそっぽを向いた。

その様子を見て、もう暫くは大丈夫だな、と思いつながら、少女が何故こんなにまでつまらなさうにしているのかを、考えてみる。

(……そういえば、かれこれ一時間と三十分は経っているな)

少年少女は今、マイクロバスに乗っている。

特に座り心地も良く悪くもない座席に、バスの中でたった二人、鎮座している。

淡々と進むバス、運転手が話しかけてくるはずもなく、ただ沈黙だけがその場を支配している。

だが、それだけではない、バスの前には電車に乗ったりもしていた。

それも、三時間も。

合計時間、四時間半に渡る長距離の移動はいかに少女がお話が好きだとしても、到底無理な話であった。

寧ろ、少女はあまり話しが得意な方ではなかった。

(まあ、かといって俺だってこれといって話すこともないしな、いや、あれがあったか)

「なあ、百合^{ゆり}」

少年が百合、と呼んだ先程までつまらない連呼をしていた少女がぱっと顔を明るくして振り向いた。

その顔はさながら、三日間餌を貰えなかった子犬が、ようやく自らの餌にありつけたかのようにだ。

「何？」

かといって言動まで明るくなるわけではなかった、もしかしたら、本人は未だ不機嫌な顔を維持しているのだと思っているらしい。

そんなに期待された目で見られても困るのだが、と思いつながら質問する。

「お前は学校、行かなくていいの？」

「別にいいよ、今は調子いいけど明日は分からない身だし。それでも行こうとか思わないけどね」

いつも通りに、しかしどこか諦めに似た憂いの表情をした反応に「そうか」とだけ返して、またお互いに黙った。

――百合は、少年――^{かみしろまこと}神代真一の妹だ。

元々体の弱い彼女は、学校には行っていない、かといって通信もやってもいない。

幼少より原因不明の病により、体力は今時の十五歳少女のそれを下回るほどに少ない。

故に、百合はいつも家で家事だったり何だったりして暇つぶしをしているらしい。

そんなこんなな家庭の複雑な事情によって、此度は遠路遙々やって来た真は高校二年生にして転校することを決めた。

ただ、真にも若干の懸念がある、それは妹は友人と呼べる者が全くないことだった。

本人はそれでいいと言っているが、どうしても気になってしまうものだ。

(こつこつ機会に学校に行かせてみるのもいいかもしれないな)

「なあ百合……」

いい機会だから、と言おうとして、止めた。

いや、言えなかった。

隣で先ほどまで喧しい程に話しかけてきた少女は、少年がいざ話そうとすると、気持ちよさそうにきっちりした姿勢で寝てしまっていた。

それを見て、真はため息をついた。

そして思った、もしかしたら自分がそういう話をしようとしているのに気づいてさっさと寝たのではないかという予想。

真は、自らの妹をそんな風に見ていた。

時間にして、約三十分後、バスは大した重心移動をさせずに目的地へ停止する。

百合を起こし、コンパクトに纏めた手荷物を持ってバスを降りる。バスは一方通行で、帰りは誰も乗せずに去ってゆく。

当然、二人以外に乗っている者はいないので、少し離れるとそのままターンをして元来た道を戻っていった。

バスを降りて一番最初に見えたのが、これから自らが通うことになるであろう学校。

人魔学園、それが今向かっている目的の名前だ。

国立魔法大学付属人魔高等学校《こくりつまほうだいがくふぞくじんまこうとうがっこう》。

二二五年現在において、日本が独自に有するその存在を秘匿された、所謂”魔法”というやつを”正しく”使う為に、将来のある有望な若者に広めようという意思の下で創られた学校の一つである。魔法を教える学校は、高校で五つ、大学を含めて八つしか日本国にはない。（外国にもあるが、正確な数は把握出来ていない、これは外国が日本にも思っていることである）

真も、そして百合も”魔法”という存在を確かに知っている。それがどんなもので、どういう使われ方をしているのかということも。

そしてそれこそがこの学校に招かれた最大の理由であった。

魔法の存在を知らない者を招くことは出来ない、つまるところ言い換えれば魔法を知っていれば入れるということでもある。

尤も、一般教養を受けている者に限るが。

今日はその、人魔学校の入学式の前日であった。

バスも去り、目の前に聳え立つ豪華な校門を見据え、真は決心する。

とりあえずまあ頑張るか、と。

「――さて、行くか……っておい」

「んー？ んふふふ、なあにー……兄さん？」

「いや、何で俺の腕にしがみ付いているんだ？」

自らが緩い決心ながらも心なく格好つけていたというのに、同じくしてここに来ている――学校に通うとは言っていないが――百合は発展途上ならぬ先進国並のアレを押し付けて頬を腕に擦りつけて

いた。

間違いない、誰かに見られていたらあらぬ誤解を招くこととなる。そんな真の不安をよそに、百合は言い放つ。

「疲れた故癒し求む」

「古風に言われてもなあ……」

何でそれで癒されるのか、などとは言わない、それを言って以前怒られた記憶があるからだ。

前途多難、そんな言葉が頭に過ぎった。

シェイクスピア曰く、「世の中には幸福も不幸もない。ただ、考え方でどうにでもなるのだ。」

唐突にそんな言葉が頭に浮かんだ。

特に理由はない、どこかで読んだ雑多な本の中に、そんな言葉があつたのを覚えている。

意味は言葉のまま受け取ればいいのか、それとも言葉の中に潜む深い意味を探ってみた方がいいのかという疑問すら記憶に新しい。

そして自分で得た解釈はこうだ。

とりあえず前向きに生きる。

そう、それはこんな状況にも当てはまるはずだ。

「んふふー」

語尾に音符がついているんじゃないかというぐらい浮ついた声音で口ずさむ百合。

否、何か音符のようなものが見えたような気がしなくもない。

真が突然思考停止——基^{もと}現実逃避——をした理由は目の前にある。

「それで、神代真君」

今、目の前にいるのは無精髭を生やした飄々とした五十台ぐらい

のおじさん。

しかしその風貌はどこか、さながら戦争より帰還した戦士の匂いを漂わせている。

「はい、何ででしょうか校長先生」

「この……なんというか、こつ甘つたるい空気はどうにかならぬかねえ、真面目な話をする予定なのだが……」

よつな気がする。

「兄さん分ほじゅーちゅー……」

「無理です」

「分かったこのまま進めよう」

この校長には理解力があることは分かった。

学校の敷地は思いのほか広く、目的の場所までどうやって行くかと考えていると、一人の男性が校長の使いだと言い、それについてきて、今に至る。

バスを降りてからというもの、百合が腕から離れる気配は一向になく、仕方なく室内までダラダラと入ってきては「疲れた」と言つてくつつく腕を変えたのだ。

無論、相手方は既に待機している状態、失礼なのは分かっているが、どうしようもなかった。

百合は、基本誰がいてもいないものとして生活しているからだ。

校長の前だからといって、人目を憚る行為をしても、本人はただ「こついう」状況楽しんでるだけだ。

それが分かったのだらう、校長も少々驚きながらも気にしないと云った風にしていた。

流石、こついった学校の校長を務めているだけはある、といったところだらうか。

そして、隣で何か考え事をしている百合を尻目に、会話が再開された。

「それで、真君。」

事前に渡してあったパンフレットの方には目を通してくれたかい？」

「ええ、魔法を持たざる者と、魔法を持つ者。」

互いが互いを認め合い、高め合い、切磋琢磨し練磨する学校を目指す、でしたよね。」

現実がどうあれ、俺はこの意見には同意します」

「あいたた、直球ストレートもらっちゃったねえ。」

でもそれが現実、実際問題”魔法”を知らない人の人数の方が大多数、それに加えてこれまでの歴史をまるごとひっくり返すような真似、君が言うように我々が抱く理想に到達するには数々の試練があるだろうね」

自分もそう思っているということを示肯して示す。

「そこで、君にはこの隔離された学校でもって、外の人間からこの人魔学校を見たら、どういう風に見えるのかどうか、意見を聞きたいんだ」

「それが俺がここに呼ばれた理由だということとは分かっています」

そう、人魔学校における魔法の有無による精神的格差、その調査という名目で真はこの学校に転入することとなった。

言わばテストケースとして、学費免除と諸々の理由から、転入を決意したのだ。

「君が理解が早そうで助かるよ、ところで大方の話は事前に贈った書類に書かれていたもの意外にないし、他に何か聞きたいこととかはあるかい？」

編入手続きは向こうがしてくれろと言っている、勉強に関しても無問題、友達作りは今考えることではない。

真自身、特にこれといった要望もなく、後は定期的な報告を面談という形で報告することになっている。

そこで、ふと思いついたことを聞いてみることにした。

「では、お言葉に甘えまして。」

今回はテストケースとして招かれましたが、それは俺だけということ

とで宜しいのでしょうか？」

「ああ、それか……んー難しい質問だねえ。

そもそもな話、君にも伝えてある通り、君は一応他校からの転校ということになっているんだ、学校には魔法を使える者が人間として優位に立っていると考えている人間も少なからずいるからね。

そのことを踏まえて考えた結果、君にはあくまで家庭の事情により転校してきた、というでしか学校には伝えられていないのだよ」

なんとなく、校長の言いたいことが真には分かった。

「つまりは俺にも、もし転校生がいたとしても、それが外部の人間だと悟られないように教えることは出来ないってことですかね」

「そうそう、その解釈で間違いないよ！」

いや、やはりしつかりと話の通じる相手と話すのは気が楽でいい！」

普段どんな人と話しているのか、とても気になるものだが、それは置いておく。

話もひと段落し、軽く息を吐く。

そして最後は、校長の一言で締めくくられた。

「お疲れ様でした、明日から宜しく頼むよ」

「ええ、とりあえず頑張ってみますよ」

「――兄さん、今日はお魚料理にしようと思うんだけど、何がいいかな？」

(さっきからそんなことを考えていたのか……)

もはやシリアスのシの字も出ないような、そんな空気になってしまったので、その場で解散となった。

百合にはとりあえず適当に返答して、二人は今日から住むこととなっている家へと帰っていった。

一話 少年少女の憂鬱（後書き）

この作品は、作者の創作意欲によって投稿スピードが違います。

時間経過

場面転換

大型転換

とじてやっています。

一話 友達は淑女と馬鹿と天才とお転婆娘（前書き）

この作品はフェックションです。

二話 友達は淑女と馬鹿と天才とお転婆娘

ランニング、それは真が幼少時より親から、毎日続けよと言われた数少ない事柄の一つである。

体に溜まった窒素を吐き出し、汗を流し、体力もつくし、何より走り終わった後の爽快感がいい。

そんな訳で真の朝の日課はまず長距離のランニングから始まる。

「はっ、はっ……ふー」

「お疲れ様、兄さん。」

朝食の準備は出来るからシャワー浴びて来てね」

「分かった、すぐに行くよ」

十キロという距離を毎日ハイスピードで駆け抜け、体もよく温まって帰ると、妹が食事の用意や学校に持っていく弁当を作っていることが常だった。（今日は午前で終了な為、弁当は作ってはいない）

高校一年生の時から続いている日課ではあるが、真は百合に対して感謝の念を忘れたことがない。

朝早くから起きて、弁当や朝食を作ることが体の弱い百合にとって辛いことだというのは分かっているが、それでも本人がやると言っただけで聞かないので、任せてもらっている形だ。

それに、百合は料理が好きだった。

「とりあえずさっさと行くか」

素早くシャワーで汗を流し、居間に行くとき百合がテーブルの上に一人分の朝食を用意していた。

トーストに、卵焼き、それとコーヒーだ。

ジャムは苺やら何やら数種類用意されていたが、今日はブルーベリーの気分だった。

そこでふと、真は思う。

この家に、自分達は昨日来たばかりのはずだった。

勿論、転校に当たってこの家に引越すこととなっていたのだから、前もって視察に来ていた。

だからといって、百合の対応はいささか早すぎるのではないかと。

家は一軒家で、内部構造的にはリビングと台所、トイレに真と百合の個室があるだけだ。

それでも十分ではあったが、荷解きから今の朝食の準備。

本来なら、今日の朝の朝食はもっと簡単なもので終わりだと思っていた真は、百合の柔軟過ぎる対応に少しばかり疑問をもっていた。

――だが、それだけだ。

家に慣れるのは悪いことではないし、自分にとっても喜ばしいことだ、ならば何も気にする必要はない。

「ん……今日も上手いな、百合のコーヒーは」

「ありがとう、兄さん」

それに何よりも、こういう言葉で良い気分が始まる朝の方が、真は好きだった。

「それじゃ行って来るけど、あんまり無茶はするなよ？」

場所は玄関、現在時刻は七時半ちょっと、学校へ行くのには良い時間だ。

「無理」

「無理じゃない、帰って来たら遊びにでも付き合っただけだから？」
ただでさえ体力の少ない百合は、家にいるのがつまらないとふらふらと外へ飛び出してしまふことがある。

勿論、買い物へ行くことが多数なのだが、それでも無理はしないように言っておかなければ、何かで無理をしてしまつたらと思う。真は、妥協策でもって説得する。（いつもはしないが、百合が無

理だと言った時には出来るだけそうしている)

「……分かった、必要な買い物だけしたらすぐに帰る」

「よし、ならすぐに帰るようにするからな。」

何かして欲しいことがあったら、帰ってから聞くからな？」

「っ……それならツイスターゲーム」

何やら空耳が聞こえてきたので、扉は勝手に(真が高速で)閉められた。

家から学校まではそう遠くない、そもそも遠くに住むのではあれば、わざわざ引越す必要などありはしない。

真は小走りで学校へ向かう。

毎日ハイスピード疾走で走っている真からすれば、汗一つかくこともなく目的地までたどり着くことが出来る。

それでも、真はスピードを無理やり少し上げた。

(帰ったらツイスターゲームとか……)

これまたある程度の知識として、知っている。

ツイスターゲームは、男女が仲良くしてくんずほぐれつな状態に陥るための娯楽ゲームだということを。

真が走る速度を上げたのは、今だけでもその事実から目を背けたかったからに他ならない。

ただ、もう一ひとり人物が必要ではないか、とは思っていたが。

「ふっー」

ゆっくりと息を吐いて息を整え、間近に見える校門を目指す。

ここの生徒は殆どが徒歩で、それもそのはずこの学校には寮があり、大多数の生徒はそれを利用してゐるからだ。

真が寮に入らなかったのは、男女別に分かれている寮では百合と

共に暮らすことが出来ないからに他ならない。

故に、登校する生徒の歩く向きは自然と真とは違い、少なからずの生徒が寮をしない生徒が珍しいのか時々チラ見してくる時がある。真はそんな視線を気にせず、まずは職員室へと向かうことにした。

「失礼します」という掛け声と共に室内へ入ると、一人の女性がこちらへやってきた。

「おう、お前が神代真で間違いないな？」

朝から元気潑刺といった風の胸元を異様に見せびらかしている彼女は、ここにいるということは先生の類なのだろう。

日本人の象徴ともいえるべき黒髪を一本に縛り、雑な動きの中にどこか美しい大和撫子のような風格を持っているかのようにも見える。はつきり言うのと、先生だとは到底思えなかった。

「はい、間違いありません。」

先生は俺の担任教師で間違いありませんか？」

「うむ、間違いはない！」

ノリなのか、素なのか分からないせいで、リアクションがとりにくい。

そもそもこの先生の年齢はいくつなのだろうか、もし三じゅー

「変なことを考えていないかい、真君？」

「……いえ、先生はお若いなと」

鋭い、という感情は一切表に出すことなく、褒め言葉でもって逃れる。

正攻法だ。

現に先生は「ほう……」と言ってこちらを品定めをするように上から下まで見てくる、その視線からは不快感の感じはしないので失敗はしていないのだろう。

「お前、良い体つきしてるじゃないか……ま、それはおいといてと。今日からお前の暮らすの担当をすることになった北条由美子だ」

若干セクハラ発言のようなものを聞いたような気もするが、今は

あまり気にしても意味はない。

「して、先生は何か嗜んでおられるのですか？」

先程の、大和撫子のようだという件を好奇心程度に聞いてみる。

その質問に、由美子は眉を吊り上げた。

「何故、そんな質問を？」

「いえ、他意はありませんよ。」

ただ、その雑な動きの中に時々、摺り足だとかおかしなものが入っていたもので」

「成る程、確かに私はそういった習い事も、幼少時にしていたな。

だが如何せんこの正確だ、そのような動きは似合わぬだろう？」

「そんなことはありませんよ、とても良くお似合いです」

「ふふん？」

さてはお前……ジゴロかつ」

「違いますよ」

「じゃあ何だ、天才ナンパ師か」

「はあ……先に行きますよ」

これ以上は埒が明かない。

「あ、おいつ、待たないか！

先生より先に行くんじゃない、「こらあ！」

「よし、入れ！」

真が由美子と共に教室へ来たまでの道のりは割愛され、2・Aと書かれたまだ白いままの札が垂れ下がっている教室の中から声が発せられた。

教室の扉を開け、そのまま左側に見える生徒達には目を向けずに教室の中央とも言つべき教卓の傍にいる由美子に並んで立つ。

隣から「名前とか趣味とか言え」と言われたので、とりあえず頭に浮かんでいた言葉を出してみる。

「神代真です、特技はこれといったものはありませんが体は丈夫です、よろしく」

「お願いします、と付け加えなかったのは、自分には合わない台詞だと思っただけだからだ。」

真の知っている範囲であれば、こういう時、「あ、お前はあの時の！」みたいなことが起きるのだとか、そんな夢見がちなことを思いつつそんなことは起きない方がいい思っていた。

そんなことをされれば当然、クラス及び学校で自然体でいられなくなることも間違いなし。

だが、そんな思いは儂くも散ることとなった。

「ああ！」

突如、自らが座っていた椅子をガタツと揺らして立ち上がり、
「いかにも」な少女が指を刺してこちらを見ている。

真は、その少女を知らなかった。

「……誰だ？」

見知らぬ誰かに指を指されて大声を上げられる程、真は恨まれるような生き方をした覚えは……ない、はずだ。

口から出た言葉も、自然と発せられたもので、悪意はない。

「誰だとは何だ誰だとは！」

あの時の恨み、よもや忘れたとは言わせぬぞ！」

そう言った、金髪のツインテールをした身長が小学生並みの少女は更に憤慨して地団太を踏みながらキーキー猿のように喚いている。
いや、言い方が悪かった、ただ五月蠅いだけだった。

真からしてみれば、謂れ無き恨みをただ理不尽にぶつけられているだけなのだ。

「ふむ……」

もしかしたら、自分は何かをしてしまったのではないか、と過去を振り返ってみる。

「……ふむ」

が、そんな過去は見当たらない。

「『……ふむ』じゃないわよ！」

まさかつ、まさかとは思うけどこの私の顔を忘れたと言っんじゃないでしょうね！」

「知らん、それより先程からうるさいぞ、天保山金髪ツインテールよ、」

「……何よつ、人を外見で呼ぶんじゃないわよ！」

あと天保山って何なのよ！」

「何って、日本一最も低い山だ、知らないのか？」

「キッシー！」

どうやら背丈のことだと理解したみたいだ。

「……ふむ」

どうやら、本当に何かあったのかもしれないな、と少しばかり思ってみたが、やはり心当たりのないことなど自らの罪に数えられることはなく、かといって全く気にしないという訳にもいかなかった。そこまでのやり取りを振り返ってみて、思う。

何故、クラスメイト達は黙っているのかと。

確か入ってきた時に、横目で見た感じでは窓側の場所に、空席は一つしかなかった、と。

そして、そこは自分の席であろうということは容易に想像出来た。そこで気づいた、これからクラスメイトになるであろう者達全員がこちらを見ていることに。

(何故……何も言わないんだ?)

疑問は尽きないが、とりあえずはこの場の進行を進めるのが先だろつ。

「先生、席に着いても宜しいですか？」

由美子はそれで我に返ったらしく、「ああ、お前の席はあそこだと先ほど見た空席を指差した。

そこにそのまま歩いて行くのだが、刺々しい視線がいくつかと、冷やかな視線多数、その他少数といった風な視線を向けられたが、我関せずと席に座る。

不意に隣から視線を感じたので、挨拶をする。

「神代真だ、よろしく」

「あっ、えっ、は、はい！」

「お前凄えな！」

由美子による、真の為の各自の自己紹介は滞りなく終了し、先程まで五月蠅かった天保山も黙っていた。

その後、休み時間に入った直後に突然机を叩く音と共に渡来してきた原住民はもはや言語が理解不可能な程に荒ぶった声でもってやってくる。

「ちよつとあんたうるさいわよ！」

男の言葉が耳障りだったのが、遠くから茶髪の似合う少女が男へ向かって叫ぶ。

「うっせえな！」

やるのかこの野郎！」

「やんないわよ！」

あと野郎って言うな、私は女だ！」

「はっ、お前みたいなるさい野郎は、野郎で十分だ！」

はつきり言つて二人の方が五月蠅かった。

あと、案外仲はいいのかもしれないと思う。

その後も名も知らぬ五月蠅い二人はそのまま睨み合っている。

もはや、何が何で何なのかと、真はため息をつきたくなっていた頃だった。

「えっと、少し宜しいでしょうか？」

「ん、何だ？」

言葉は打って変わっておとなしめな感じのする高めの声が聞こえた。

顔を上げると、そこには黒髪の良く似合う、“ミス和風”の称号

を頂いていそうな少女が手を前で組んで立っているのが見える。

「え、えつと……」

話かける内容を考えていなかったのか、少女はもじもじと組んでいた手を動かしていた。

「ここは、自分から話しかけるのがいいだろう。」

「神代真だ……真でいい、よろしくな」

手を差し出して、柔らかめに話しかける。

「あつ、竜胆^{りんどうしあひ}菜です、宜しくお願いします」

おずおずと握手をしたところ、対応に間違いはなかったようだ。

「じゃあ竜胆さん、何か用があつたんじゃないか？」

クラスメイトになるのだし、とりあえず親交だけでもという気持ちもあるのだろうが、先程の男の態度から見て、先の天保山とのやり取りが一因しているのではないかと、推測する。

理由としては、仲間が馬鹿にされたからか、ふてぶてしい態度が気に入らなかったのか、それとももつと別の理由があつたりするの
か。

だが、挙げた二つの例はこの竜胆という少女からは感じられない。
やはり、親交だけだったのか？

「あの、えとつ……」

「「あぁー……！！！」」

やっとこさ、竜胆が声を発しようとしていたところを、先程の元気が有り余っているのだろう男女二人組みが大声と共に戻ってきた。その語気に、自分が何か悪いことをしたかのように感じたのか、竜胆はあたふたしている。

「竜胆ツ！ お前、俺が一番に話しかけたかつたのに横取りしやが
つたな！」

横暴だった、竜胆が若干ながら可愛そうである。

「ちよつとあんた、何菜を困らせてるのよ！」

「え、えつ！ 俺のせいだよ、なあ、今は竜胆さんの話を聞いているんだ、少し黙ってはくれないか？」……え？」

さつきから、人が人の話を聞こうとしているのに邪魔してくれるものだから、一喝、とはいかないものの、やや不機嫌気味に言ってみる。

因みに、全くもって機嫌が悪いというわけではない。

ただこういう時は、そういう風に言ってみると思いの他黙ってくれるものだ――良い印象は持たれないが――。

案の定静かになった男と、それと同時に黙った少女を尻目に視線を竜胆に移す。

それだけで、真が何を言いたいのか分かったのか、意を決したように交差していた手をぎゅっと握り締めて（そこまでの決意なのか分からないが）顔を上げた。

「それほどの用事という訳ではないのですが……えと、何か困ることがありましたら何でも言ってお下さいね、ということだけだったのですが……」

どうでしょうかと、言わんばかりに俯いたまま視線だけを上げる所謂上目遣いというやつを竜胆はしていた。

それがわざとなのか天然なのかということ、真は置いておき、竜胆に返す言葉を模索する。

「……分かった、まだこの学校のこととは分からないことが多いからな、何かあったら頼むよ」

どうして、という質問はしない。

もしも善意でもって接してくれているのならば、それは相手に対して失礼だからだ。

「は、はいっ！」

何ともない、普通の返答に竜胆は元気良く応えた。

「――先程はすまなかったな、ああでもしないとお前達は止まりそうになかったから仕方がなかったんだ」

「おう、気に済んな！」

俺達も大声ではしゃいじまって悪かったな、俺は靈童子れいどうし竜也りゅう、ヨロ

シクな！」

先程の天保山から竜胆までの一幕を終えて、見知らぬ相手に黙れと言ったことを謝ると、男一竜也は快く許してくれた。

元々は、竜也が悪かったということは置いておくとして、だ。

真と竜也はお互いの骨が軋み合いそうな程の握手をした。

「それで、竜也はさっき俺に何を言おうとしていたんだ？」

竜也には、こういう付き合い方をした方が良く、と思ったのは半ばノリである。

真が思い出していたのは、「お前凄げえな！」という発言、一体何に対してなのか甚だ疑問が残っていたところだ。

「ああ、それかっ……ん、何だっけか？」

当の本人は、先程の少女とのやり取りのせいで記憶の彼方に追いやってしまったのか、頭を抱えた。

「おいおい、もうついさっきのことまで忘れたのか？」

「あ、こいつ鳥頭だから気にしないだね」

話に入ってきたのはどこの国の生まれか、真つ赤な髪をを真つ直ぐに伸ばし、髪に特徴のある髪飾りをついているのが印象な、先程から竜也とやり合っていた少女だった。

肩にかかった髪を振り払う仕草はどこか、美しいものがあつた。

「まあ、竜也は少ししたら思い出さるうとして、一つ質問があるんだが？」

「？ どうぞ？」

「名前は？」

「コンスタンティア＝ルビーよ、ティアって呼んでくれると助かるわ、真君」

名前は洋風だが、日本語は上手なようだ。

「分かったよ、ティア。」

ところでもう一つ、質問してもいいか？」

「いいわよ、寧ろどんどんしてもらっても構わないわ」

「なら遠慮なく……お前達、本当は仲が良いのか？」

「「良くない！」」

「息、ぴったりじゃないか」

眉を顰めていがみ合う二人に良くもまあ息が合うな、と関心する。

「「真似するな！」」

「ま、まあまあ二人共、落ち着いて……ね？」

すぐに仲裁に入ったのは二人の勢いに乗っけていけず、静かにしていた竜胆だった。

竜也と少女は竜胆に咎められて、バツが悪そうに「ふんっ」と言っ
つてそっぽを向いてしまった。

このままでは、平行線だと判断し、話を進めることにする。

――としようとしたところで、丁度良く学校のチャイムが鳴り、
休み時間が終了した。

由美子による授業は淡々と進み、これからのことを色々と話して
いた。

取り分け耳に残っていたのは、魔法の選択授業のことについてだ
った。

ここ、人魔学校はかつて日本軍の訓練学校であったという。

二千年以降より年々世界中での戦争は減るにつれて、日本軍が使
わなくなったという跡地を、現地での戦争の跡地を見る為という名
目で魔法学校を建てたのだという。

少し話しは変わるが、毎年、日本国内の魔法学校同士で他校との
交流という名目で他流試合が行われる。

一般的に、魔法は戦闘用、医療用、日常用に大別され、この他流
試合では、主に戦闘用魔法をどれだけ扱えるか、という”世間一般
の高校”では絶対に有り得ないイベントが開かれている。

そして話を戻す、今由美子が語ったのは、その他流試合に出る為

の生徒を選出するものであった。

そう、この学校では元々が軍隊が使用していたということで、訓練の出来るように近くに深い森林があり、浜辺がある。

その為、この人魔学校には”戦闘用”の魔法を学ぼうとする軍人志望の生徒が集うのである。

――そして由美子の話に戻る。

この学校では主に、ブラックとホワイトに区分されることとなる（制服も色事に分けられる）。

戦闘用の魔法を学びたいのであればブラック、そうでないのならホワイトということとなる。

そして大体この学校では、七対三の割合でブラックが多い。

現在、この教室内でも黒い制服と白い制服で、七対三の割合が生じている。

真もまた、白い制服を着たクラス中、十二人の内の一人だった。

付け加えると、竜也とティアはブラック、意外なことに竜胆もまたブラックである。

「さつて、それじゃ授業を終了します！

各自どこか変な場所に寄ったりしないように！

さて、私はさつさと帰ってお酒お酒ー」

スキップスキップランランランと軽やかな足取りで帰って行く由美子をこのクラスの生徒達はさも当然かのようにしているのは何故なのだろうか。

やはり、魔法という存在があると世間一般からかけ離れた感性を持ってしまうようになるのだろうか。

否、それはまだ早計だ。

あの先生が以前からあのような態度を取っていて、それに耐性が出来てしまったという可能性はなきにしもあらずだ。

だとしたら、先の感性の変化というのは、先生だけなのかもしれない。

(これは報告するに値しないな……)
魔法の存在、そしてその存在価値、使い方、まだまだ考察する部
分は尽きないようだ。

これは、とある一軒家での、とある出来事である。

その場所では、少年がブリッジを、少女がそれに覆いかぶさるよ
うにして完全なる密着状態にあった。

「兄さん……兄さん」

兄を呼ぶ少女から発せられる、生暖かい吐息が首にあたる。

少女の吐く息は、不規則な「はっ、はっ……」という典型的な疲
労のように見える。

頬は紅く照らされ、その瞳からは涙でも浮かべているかのように、
淫靡な輝きを放っている。

その姿は真っ白なシャツをその体には分不相応に大きいサイズを
着ていて、袖口が余っているのが分かる。

「あつ、兄さん……だめえ」

そのシャツからは、二つの北半球がこれ見よがしにとその存在を
アピールしている。

そう、少女は所謂ノーブラというやつだった。

否、ノーブラノーパンであった。

「だめだよ、んっ、そんな……とこお！」

絡み合った手や足がもぞもぞと動く、どうやら何かを探っている
ようだ。

途中、少女の胸が当たったりしていたが、気にしないようにして
いた。

というよりそれどころではなかった。

兄と呼ばれている少年は、今、目を瞑った状態にある。

両手両足は現在、思うがままに動く状況ではないが故に、少年は

眼で見る現実ではなく過去を思い返すように現実逃避をしていた。

（あれは……本気だったのか）

今朝、少年は少女に出来るだけ何でもすると行った（言ってしまったの間違い）のだが、少年はそれを後悔していた。

（もつと簡単なのにおけばよかった）

「今度は兄さんの番……だよ？」

ため息をついて、現在目の前にあるものを、なるべく視界に収まらないようにして眼を開ける。

すると目の前にすすつと手動で回す、色が四色あるルーレットがやってきた。

それを、片手で何とか回すと、赤色が出た。

ルーレットに備え付けられた、ボタンを押す。

すると色に分けられたルーレットは、今度は右手、右足、左手、左足と書かれたものが四つに分けられたものになった。

「に、兄さん、はやくう〜」

ふう、と耳に息を吹きかけられて、背筋が強張るのを感じるとともに、ルーレット勢い良く回した。

針が示した先は、左足だった。

つまり、左足を赤のゾーンに置かなければならないのだ。

「……ぬ」

だが、その赤ゾーンは、現在左足が置かれている辺りには赤色の場所はなく、諦めて他の場所探すと、丁度反対側辺りにあったのだ。そして、そこにしか左足は置けなさそうだった、他の場所を目指せば恐らく足を攣るだろう。

だが、それがいけなかった。

左足の傍には黄色に置かれた右足があり、反対側へ行くためには体を回転させなければならぬのだ。

だが、下手に手を抜いてわざと崩れ落ちたりして負けると、少女は再戦を申し込んでくるだろう。

断れば今後、やることがヒートアップしてしまう、それだけは避

けなくては。

「あんっ」

体を反転させるためには、少女の体と自らの体が摩擦してしまうのは当然で、少女はどこかとは言わないが、どこかが擦れて先程よりも更に艶かしい声を発していた。

その声を聞いた瞬間、体からまるで生気を奪われたかのように、崩れ落ちた。

「ひゃうっ!?!」

少女は、少年の上に重なっていた。

これが何でもすると言った真の、転校初日の最大の出来事であった。

二話 友達は淑女と馬鹿と天才とお転婆娘（後書き）

こんばんわ、作者です。

今回は、この作品の趣旨を先に述べさせて頂きます。

この作品では、登場人物達一人ひとりの「魔法」という力、存在への意識、価値観、使い方の用途など、彼らが魔法に対してどんな気持ちを抱いているか、これからどうしたいか、ということを実現していきたいと思っています。

三話 爆発と、正体（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する人物、固有名詞は大体関係ありません。

三話 爆発と、正体

程良い疲労感はい快い快適な睡眠をもたらす。

それは、昨日の起こったことについても決して例外はないはずである。

「……ふう」

「お疲れのようですね、昨日、何かあったのですか？」

「竜胆さんか、まあ……少し遊び過ぎてしまつてね」

現在は時刻にして八時半、朝のHRも終わつたところで、一息ついたところを隣にいた竜胆が心配そうに聞いた。

あれが遊びと呼べるものは世間に対し、アンケートをとつてみたいものだが、それをすると自分のプライベートを公に晒しているようなものなのでしない。

そしてそれとは別に、何か突き刺さるような視線を受けていて、それが原因の一端を担っている可能性もなくはない。

しかし竜胆は、そんな真の苦勞を露知らず、これまた以外といった風な体で口元を抑えている。

「遊び……ですか、神代君でも遊びつてするんですね」

一体どういふ風に見られていたのか、自分は至つて健全な、まだまだ健全な高校二年男子である、と真は思う。

——確かに、最新のゲームなどにはあまり興味はないが。

「なあ竜胆さん、君は一体どのような目を俺を見ているのかな？」

自分の失言に気づいたのか、「あ、あはは」と言いながら目を宙に泳がせている。

そして真は思う、今日の竜胆は昨日に比べて格段に話しやすいと。

昨日はおどおどあたふたとした、落ち着きのない引つ込み思案な（真も大概失礼である）性格だと思つていたのだが、今日はやけに

落ち着いたようにも見える。

もしかしたら、一日置いて心の整理が出来たのかもれない。

竜胆はそのまま「あ、次の授業の準備しなきゃ」と言っただけで自分の席へ戻った。

(そういえば、次の授業は魔法の制御訓練、だったか)

チャイムが鳴り、全員が席に着くと、やって来たのは白衣を纏った眼鏡をかけた優男のような教師だった。

「えーと、今日は初めての授業になりますし、まずは私の自己紹介からー」

それから淡々と年齢、趣味、得意な魔法などを列挙すると、程なくして本題に移ることになった。

「君達も知ってる通り、魔法は便利だ。

山で遭難したならば火を起こす、火事が起きたならば水で消せる、等々のように用途は多種多様だ。

それは私達魔法使いが文明と共に進化を続けてきたからに他ならない。

でも、君達は常に肝に銘じておかなければならない、魔法の便利さと、その危険性を！」

先生の言うことは至極全うなものだった。

確かに、魔法というのは道具要らずのどこにでも運べる便利なものだが、しかしそれは裏を返せばどこにでも持っていけるということでもある。

飛行機に乗るためのセンサーに魔法使いは検知出来るだろうか、答えは否、例え一人ひとりが非力な者であれど、機内で火を起こせるのならば、それは明らかに危険なのだろう。

魔法使いとは、そういった世間での危うさと、利便性を天秤にかけた、危うい存在だ。

「人は言います、空を飛びたいと。

しかしそれが出来てしまうのが我々、魔法使いです。

夢を失くした人はやがて目標を失い、墮落する人生を歩むこととなるでしょう……。

私は、君達にそうあって欲しくありません、魔法使いは危険ではないとっ、人々の味方だとっ……そう言える人に育って欲しいのです」先生の言うことは一理ある、だがもつと明確な目標を指し示さない限り、その言葉は意味のないものになってしまう。

或いは、それを自覚して欲しくて自ら魔法教師という立場になったのか。

「さて、前口上はこれぐらいにしておいて……それでは誰か、簡単な魔法をここで見せては頂けませんかね」

「うむ、ここは私の出番であるな！」

そう言っって勇ましく立ち上がったのは、久しく見ることのなかった天保山だった。

彼女は真の方を見て、にやりと笑った。

真はそれを知らん振りしていたが。

「おや、ミラっエクセリーゼさん……貴方がやってくれるのですか？」

その瞬間、教室が凍りついたのを俺は見逃さなかった。見ると竜胆の顔は以上に強張っていて、どこか虚ろなようにも見える。

まるでミサイルを前にして死を予感した兵士のような顔。

そのまま視線を動かし、竜也とティアにも向けてみると、二人は何か椅子から若干体を浮かしつつある。

そう、さながら絶望的戦況を見て、敗北を予感して逃走する敗残兵のような。

(これは……まずいのか?)

何分この学校に来て間もない真なのだ、こっという空気には敏感だが、何が起ころかなど分かりようもない。

「おい、竜胆……何が起こっている？」

その問いかけに、竜胆の眼はこっ言っていた。

もう、終わりだと。

その言葉でもって何を理解しろというのか、疑問は尽きない真だが、竜胆は話にならないようだし、このまま事態を眺めるしかないのだろう。

「では、お願いします」

「うむ、心得た……はあああああああああああ！」

「え、ちよ、ミラさん!？」

真は、瞬時に理解した。

今回の話は、簡単な魔法を完璧にコントロールするということを他の生徒に見せる為のものであると。

そして天保山ことミラが容易した魔法を行使するための、魔方陣というやつは至極簡単な作りなもので、すこし力を入れれば発火するというものであった。

そして今起こっているのは、その簡単な魔方陣に対し、あまりにも膨大な量の魔力が注ぎ込まれているということだ。

魔法名は「ファイヤー」だろうが、これでは「ボルケーノ」になりそうだ。

ただでさえこんな狭い教室で、そんな魔法を使われれば大惨事になりかねない。

見ると、生徒達は防御魔法を展開させていた（一部は逃走を試みていた）。

この事態が、事前に止められなかったのは真が考えうる限り二つある。

一つは先生が新任教師で、ミラが放つところなるということを知らなかったこと。

二つ目は、生徒達がミラを止めないで見るところを見ると、それがミラ＝エクセリーゼという少女の性格なのだろうということだ。

「フアー」

(アー?)

どこからか、雄たけびのような、甲高い悲鳴のような声が聞こえてきた。

それはどこか、近くではない、校舎に反射してやまびこのようにあーあーと繰り返されている。

それが遙か上空であると理解した時、声を発していただろう声の主は突然爆発。

(誰か敵役の人でもやられたのかしら?)

彼女はあまりテレビを見ない人間であるが、”そういう”特撮のヒーローモノでは、敵役がやられた場合、大抵爆発するのだと。

そんなことを感慨深く思っていると、爆発した煙の中から人影が落ちていくのが見えた。

(いけないっ……あのままでは地面に激突する!)

体は重力に全く逆らわず、身動きもしないところを見ると気絶している可能性もあった。

そう理解するよりも先に体が動いていたのは生徒会長としての義務からか、それとも彼女の性格故か。

体に身体能力付加を与えると、彼女は通常の倍以上のスピードでもって落下する人影に追いつくが、あと少しの差でもって間に合わないかもしれないなどと弱音が心に浮かぶ。

落下する人の真下に水のクッションを作ろうと魔方陣を描こうとした直後、凄まじいスピードでもって彼女を誰かが追い抜いたのを見た。

体格からして男のはずだが、彼は滑り込むようにして女の子をキヤッチすると、そのまま体を捻りながら、落下してきた際の慣性を中和していく。

(凄い、体捌き……)

恐らく、ただあの体をそのままキヤッチしていたら、落下の際の衝撃で女の子の体のどこかが折れていたかもしれない。

彼女の考えていた水のクッションでも、衝撃は緩和出来ただろう。

だがそれとこれとはまた話が別なのである。
――何せ、彼は魔法を使っていた様子がないのだから。

「ねえ、君――」

生徒会長、みながれあやか水流綾香は好奇心からか、それともまた別の感情を抑えきれずにいた。

後悔先に立たず、ミラを投げてしまったと気づいた時には既に十字架をきりながら走り出していた。

自分でも、よくもまああそこまで豪快に投げ飛ばしたものだと思えてやりたいところだが、それどころではない。

投げて、その後に大爆発を起こすのは分かっていたが、その後どうするかということについては頭に浮かんでいなかったのだ。

窓から飛び出して（二階から）、すぐさま落下地点まで向かうと、途中に人影が見えた。

が、そんなことを気にしている場合ではない、人間は頭の方が重い構造上、落下は頭からしていくのは当然として、それをどう受け止めるかも思考中。

（勢いを殺しながら木にジャンプしていくか、それともこちらから迎えに行くか……いや、今からでは向かえに行くのは到底不可能だ……なら、あとは俺の体に任せるしかないか）

猛スピードで駆ける人影を、そのまま追い越して落下と同時に今の速さを落とさずにキャッチ、すぐさま膝をクッションにして衝撃を緩和、後は独楽と同じ要領で重心を分散する。

一人ならもつと楽なのだが、とは思うものの、無事成功。

「ふー……まっ、結果オーライってことで」

腕の中ミラにいる天保山はやはりその小さな体躯に見合うような体の軽さだ。

もつと肉食え肉、と心の中で呟いて顔を見やると目を瞑ったまま微動だにしない。

爆発の衝撃で気を失ったか、それとも体力を根こそぎもっていかれたか。

それも今考えても意味のないこと、と判断して踵を返そうとしたところ、近くに誰かがやって来ていた。

「ねえ、君……」

恐らくは先程の人影だろう、よく見ると背丈もミラと違って長身で細身なスレンダーな体型をしていた、何よりふとももがいい感じな太さだ。

真としては、厄介ごとになる前にさっさとおさらばしたいところなのだが、そうは問屋が許さないよう。

何故なら、彼女が真の行き先の進路方向にしっかりと構えているのだから。

ため息をつきたくなる気持ちを抑えて彼女に向き合う。

「お話があるのは分かりますが、今はこの人を保健室へ連れて行きたいので……」

人を抱えたまま話をするなど、傍目から見たらおかしな話だろう。それ理解したのか、彼女は首を振った。

「分かりました、では私も着いていきます」

何故、とは問わない。

恐らく同行拒否したところで、その内また尋ねられるような気がしたからだ。

そこで、協力者？を得たことに気づいた。

そう、保健室の場所をまだ知らないのだ。

真と綾香は現在、保健室のある一角に椅子を配置して座っていた。「ふーん、やっぱりそんなことがあったのね」

綾香はさもありなるといった風情で、首を四度縦に振った。

まるでミラが”あれ”をやらかすことを予知していたか、ミラが魔法を使うとああなることを知っていたかの二択だろう。

会った時にミラの顔を見て納得した様子を見たところ、後者のようだが。

「ええ、それで生徒会長はミラが魔法を使うとああなるということを知っていたのですか？」

やっぱり、と言ったのだから、これで二回目などではないのだろうということとは容易に想像が出来る。

「そうなのよ、この子だったらね、魔法を使おうとするといつ力みすぎちゃって火なら爆発、水なら津波、雷なら停電を起こすような…」
…そうね、簡単に言ってしまうえば問題児、といったところかしら」
頬を手を当てて、悩ましげにしている綾香を見るとやはり年上の女という印象をひしひしと受ける。

面と向かって分かったが、綾香は美人だ、それもとても。

一体全体どういう家から、綺麗なスカイブルーの色の髪が生えてくるのか問うてみたいところだ。

これも、魔法の影響なのだろうか、と今度じっくり考えてみることにする。

「問題児といいいますと、それなりに色々とやらかしたりしてるんですよね？」

だったら何かしらの対応策、もしくは本人にしっかりとした教育を受けられるとか……」

言わなくても分かることだが、それらは恐らくどれも試みたのだろう。

そして、失敗した。

「色々手は尽くしたのだけれどね……これはやっぱり個人の問題だから、なかなか上手くいかないのよ」

「いいんですか、そんな色々なことを本人の知らないところで俺に話してしまって」

「うーん、難しいところだけど、いいんじゃないかしら？」

だってあの子のクラスメイトでしょ？　ってことはあの子の友達、
だったら話しても全く問題ないわ」

難しいところだが、クラスのあの反応を見たところ、ミラのこと
は周知の事実なのだろう。

そうすると、何故あの新任教師（新任であるかどうかは分からな
い）はミラに魔法を使わせたのだろうか、他の教師に釘を刺されて
いた可能性は大だ。

わざと、ということやはり考えすぎだろう、今はただの教師の
過失としてみるべきだ。

「それで、ちょーっと会長、聞きたいことがあるんだけどなあー」

綾香は突然、甘ったるい声でずいっと体を乗り出す。

スレンダーな体型に見合った豊かな胸が、腕に挟まれて制服の上
からでもわかるぐらいにのめり出しているということには、気づい
ていないようだ。

「……何のことですか？」

真があくまでもしらを切るのにはもはや唯の悪あがきでもあった。

ミラを救出？する途中、真は綾香の描いていた魔法陣をちらりと
だけ見ていたのだが、その時見たものは簡単に口にして話せるレベ
ルのものではなかった。

繊細にして鮮やかな円の配置、術式の順番、力の循環経路のどれ
を見ても遜色のない、ただの学生レベルにしては些か高すぎるレベ
ルのものである。

ミラが魔法を失敗するのは、簡単な術式での少ない力の循環経路
に対し、過度の力を注いだことで起こる『シヨート』と呼ばれる、
言わば魔法の暴発というもの。

簡単なものであれば力は然程いらぬ、逆を言えば複雑なもので
はあればそれ相応の力を要するということでもある。

綾香はその、難しい方を短時間でやってのけた可能性があったのだ。

そして、しらを切るのが悪あがきであるという理由は一つ、綾香が自らの走る速度を魔法で加速させたのに対し、俺は魔法の補助なしでそれを追い越したということだ。

「分かっていると思うけれど、貴方魔法を使っていなかったわよね？」

逃げ出したかった、猛烈に。

「そう見えただけでしよう、実際には使っていましたよ、あいつを助け出す時に」

嘘だ、実際には最初から最後まで、今に至るまで魔法は一切使っていない。

それに綾香は、具体的にいつの話であるかは語っていない、こちらがそういつた具体的な場合を出すことで、そちらに意識をもつていかせようとした。

「いいえ、そんなことはないはずよ！」

私は仮にもこの人魔学校の生徒会長、魔法を扱う生徒達の模範たるべき私が、そんなことを見逃すはずが無いわ」

「事実がどうあれ、俺には俺の事実が……そして、貴方には貴方の事実があります。」

会長がそう見えたのであれば、それは会長にとって事実です、ですがそれが俺の事実であるとは限りません」

「それは詭弁だわ、貴方は魔法を使っていなかった」

「視野をもっと広くして見てください、自分だけが世界ではありません」

「……貴方、意地悪ね」

「すみません、こちらにも色々と事情があるものでして」

仮に俺が魔法を使っていないということを事実として認めたとして、それに変な噂を付け加えて吹聴するような真似を、生徒の模範たるべき生徒会長がするとは思えないが、まだ時期尚早なのだ。

綾香はそんなこちらの事情を悟ったのか、やけになったように諦めた表情になっている。

「……ごめんね、誰にだって知られたくない事情はある、っていうのは分かっているつもりなんだけどね」

自嘲気味に言う綾香は本当にただ、興味本位なだけだったのだらう。

それ維持用追求して来なかったのは彼女の確固たる自我故か。

「分かりますよ、そういう気持ち」

好奇心は猫を殺す、と言うがそれでも止められないのが好奇心だからと言って、下手に手を出していいというものでもないが。

「ふふっ、これじゃどっちが年上か分からないわね。」

それじゃこのお話はおしまいっ、また今度会いましょう、神代君？」

「ええ、その時はもっと有意義な時間にするように心懸けます、水流先輩」

「ありがと、またねっ！」

そう言ってウインクを華麗に決めてみせると颯爽と保健室から出て行った。

そして思う、ウインクとはああいう風に華麗に決めると可愛く見えるものなんだと。

それからしばらくして、保険医が帰ってきたのを見計らって真も保健室から退室した。

綾香と別れて、ミラを置いて保険室から教室へ戻ると、どうやら時間は思いの他経っていたらしく、二時間目まで終了している様子。

(転入早々サボリか……)

自分が悪いとは思っていないものの、授業をサボタージユすることへの罪悪感は拭えない。

三時間目は座学だったのですんなりと席に着けた、すると隣にいた竜胆が話しかけてくる。

「ミラさん、どうでしたか？」

爆発寸前までは諦めたかのように見えた顔も、今ではすっかり元通りになっている。

とりあえず大丈夫だ、ということだけ伝えて今は授業に集中する為、前に顔を向けた。

「真、さあ答えてもらおうぜ？」

「真君、私もちょーっと色々と聞きたいことがあるんだけど？」

「神代君、あの、その……私も少し聞きたいことが……」

四時間も恙無く終了し、百合が作った弁当を取り出そうとしてところで、勢い良く例によって三人が詰め寄って来た。

竜胆は他の五月蠅い（竜胆に比べて）二人がいるからか、物怖じしてしまっている様だ。

三人の息のあった言葉の連なりっぷりに、俺は聖徳太子ではないぞと思うものの、どうやらしつかりと答えるまで離してはくれなさそうだ。

綾香とは違って日々一緒に暮らすクラスメイトである為、ここで断つても次があるか、関係が悪くなるかだ。

尤も、この三人は後者の人間には見えないのだが。

「分かった……ここじゃ何だから、もっとゆっくり話の出来る場所に案内でもしてくれないか？」

他の生徒も気になるのか、ちらりとこちらに向ける視線が痛い。

三人は特に反対もせず頷き、ティアがそういった静かに話しの出来る場所へと案内するので付いて行く。

案内された場所はまだ誰もいない中庭の隅の方で、確かにこれから他方角からそうそう見えることはないだろう。

全員が腰を下ろすと、とりあえず話の方向性を確かめるべく、ま

ずは一番何か言いたそうな竜也に聞いてみることにする。

「それで、各々何か聞きたいことはあるだろうけど、代表して竜也に聞こうか」

恐らく聞きたいことは、三人共に一つに集約されているだろうと踏んだ。

「んじゃ、気を悪くしたら謝るけど、聞くぜ……真って魔法使えないのか？」

「何故そう思うんだ？」

あの時はただ防御魔法が間に合わなかったって可能性のあるだろ」

「だってよ、あの時……真は魔法の防御壁を張ろうとしなかった、というより魔法を使うつもりがなかったように見えたんだ、俺にはな」

その言葉を聞いて、竜胆とティアを見やる。

竜也の言っていることには全てではないが、概ね同意しているように見える。

「竜也の意見は分かった……それなら勿体ぶらずに聞いたらどうだ、俺が魔法を使わないこと……もしくは魔法が使えないことがお前達の聞きたいことなのか？」

「違うけどよ、ただ俺達の間での噂はこうなっているんだ。

真……お前が”反魔法組織”の一員なんじゃないかってな……」

「……その情報はどこからだ？」

答えは沈黙、極秘ルートってところか。

「では質問を変えよう、もし俺がその、”反魔法組織”の一員だったとしたら、お前達はどうしたいんだ？」

意地悪な質問だが、今のままでは竜也達の思惑が全くといって掴めない。

「別にどうしようとも思わねえよ、元よりそんな情報なんぞ信じてないからな」

「ありがとう、なら竜也……お前のその清潔さに俺は誠意で持って答えよう。」

答えはノー、だ……俺は”反魔法組織”の一員なんかじゃあない、魔法だって使えるさ」

”反魔法組織”とは、そのままの意味で魔法の存在を知っている奴等が、その存在を恨んでいる、もしくは自分が魔法を使えない恨みをぶつけようとしている傍迷惑な頭のイカれている集団だ。

その”反魔法組織”の連中とは一度会ったことはあるが、どうにも話の通じない奴等だった記憶がある。

「なら、何である時真は魔法を使わなかったんだ？」

そう、俺が”反魔法組織”でないというのなら、結局は最初の段階に戻る訳だ。

その答えは、たった一言の言葉で済ませられる。

「それは、俺の主義だからだ」

三人が三人共に別々の反応をする、絶句しているように見える竜也、口元を吊り上げているティア、目を点にして口をぱっくり広げている竜胆。

ただ、こればかりは誰にも否定しようのない事実であり、それが実であれ虚であれ、俺が言ったことが全てに他ならない。

「魔法を使う、使わない……それは俺の自由であり、お前達の自由だ。」

それは誰にも侵害されることのない権利だ、お前達にはお前たちの俺には俺の、魔法の不文律ルルがあるはずだ、違うか？」

少し説教臭かったが、あまり気にしても意味のないことだろう。

真の言葉に最初に返したのは、先程嫌な笑みを浮かべていたティアだった。

「そう、ね……確かにそう。」

真君、貴方はやっぱり良い人ね……試すような形でごめんなさいね。本当は”反魔法組織”の話なんてでっ上げなのよ、ごめんなさい」
今度はこちらが絶句する番なのだが、生憎とそういうことは顔を出さない主義だ。

つまりそうになると、また見方が変わってくる。

「それはお前達、三人の総意か？
それとも――」

「わ、私達だけです！ 他の人は関係ありません！」

「……ふむ」

するとまた色々と変わってくるものがある、例えば何故あの場でミラを止めなかったか、だ。

真の言ったことを最初から理解しているのならば、何故この問答をしたかという疑問も残る。

――が、答えは簡単だった。

「成る程、俺は試された訳か」

先程のティアの発言の「やっぱり」からして、やはり人柄、人格等をテストしたものと見えるだろう。

「発案者は私よ、二人は無理やり「俺は別に怒ってないぞ」……あらそう？」

やけにあっさりとした返答に、ティアは面食らった感じで目を開いている。

「その代わり、一つ質問してもいいか？」

「どうぞどうぞ」

「あの時、教室での爆発の時にお前達が防御壁を使用した目的は？」

「さつきも言っただけど、あれは貴方を試す為にやったものよ。」

けど勘違いしないでね、ミラを含めてクラスメイト達はそのことを全く知らなかったの。

もし爆発しても私と栞が全力で皆を守り、竜也は外に被害が出ないようにスタンバイしていたって訳よ」

そこまで自身があるのなら、それはそれで良かったのだろう。

ただし、教室自体が無事であったかどうかは甚だ疑問だが。

「成る程、理解したよ。」

やはり俺はお前達を怒る理由はないな……それと、結果はどうだったんだ？」

ティア、竜也、竜胆と見渡してみるが、三人共別にこれと言って

何か不満やらなんやらがある訳ではないようだ。

「百点満点の合格通知よ、ただ――」

「まさか、あの子を投げ飛ばすは思ってもなかったけど」
それについてはまた今度、本人に謝ろう。

三話 爆発と、正体（後書き）

やっと三話までいけました、長かったような、短かったような。ここまで書いてやっと自分の中で世界が固まったような気がします、溢れ出る出るこの知識、漏らさずに保管しておきたい気分です。

四話 マジック・ロジック 前編

一般に、魔法という存在が確認されたのは正確には決められていない。

そもそも、魔法という概念が、一般社会に出回っていないということは、それ即ちその存在が公には公表されていなかったに他ならない。

ならば何故、日本軍の跡地を魔法学校として建てているのかと言えば、それは一般市民には分かり得ぬことである。

ただ言えることがあるとすれば、日本の首脳達はそれを知っていて、それを世界に広めまいとしているのだろう。

もし魔法があるということが世間に漏れれば、魔法使い達はたちまちその存在を晒され、かつての魔女裁判に発展するかもしれない。そして、それに反抗する者がいるとしたら、それは大変な事態となる。

国内での内紛は望むべくもなく、魔法を知る者はその存在を世界の隅へ追いやられたということ。

それが、数少ない魔法に関しての知識だ。

――いや、もうひとつある。

それは、魔法使いを使った魔法使いによる兵団。

銃弾を跳ね除け、ミサイルを迎撃し、味方の治療をする、これ以上ない程理想的な戦争条件だ。

無論、核ミサイルやなんやらと、魔法使いでも対応出来ないものがあるだろう、それは魔法使いに限らず公平に死を与えるものだ。

故に、その条件は条件にならず、ただ白兵戦で一騎当千の魔法使いがいるならば、戦争における死者が減ることに繋がる。

つまり、人魔学校は将来に向けての魔法使いによる兵団を作る為

の施設なのだ。

(と、思っただけだな……)

魔法使いが世間に出ると、ほぼ必ず混乱が起こる。

それは人そのものの価値観を揺らがす、一種の世界恐慌とも呼べるものになるだろう。

そういったことを起こさない為に、この人魔学校を檻として作った可能性も否めない。

真は前者だと思っっているが、希望であれば後者の方が幾分ステキに見える。

(しかし実際のところ、実地訓練やら戦闘用魔法の鍛錬やら、どうも”そっち”に教育が傾いている気がするんだよなあ)

やはり魔法における将来性は、未開拓の新境地と呼ぶ他ないだろう。

(魔法使いは人間か、否か……)

人魔学校二年、神代真は今日も悩んでいた。

人は、窮屈なものが嫌いだ。

或いは箱の中、あるいは生活環境といった狭いものの中に押し込められているという意識がある場合、人はそれに苦手意識を覚えてしまう。

それはストレスになり、次第に精神を疲労させていく。

動物は何故、狭い場所を好むのか――全てではないが――それは体に何かか密着していると安心感があるからだ。

だが、それが人間に当てはまるとは決して言えない。

逆を言えば、当てはまらないとも言えないのかもしれない。

「兄さん！」

百合は真を指差し、「ずびっ！」という効果音がよく似合いそ

うな顔で突如として言った。

「つまらない！」

「我慢してくれ」

「嫌、無理、我慢、限界！」

日本語としては成り立っている（気がする）が、どうもこれは本当に我慢の限界のようだと真は思う。

真が人魔学校へ編入してた一週間、百合は校長へ挨拶へ言った時以外はしっかりとおとなしくしていた。

家の中をくまなく調べたのか、それとも外出して探検に出たのか。色々やったであろうことはあるが、ついにと言うべきか、我慢の限界は突破してしまっただらしい。

そこで真はふと、時計を見る。

時刻は朝の七時、ランニングも終わったので後は着替えて学校に行くばかりだ。

（少しぐらいは話が出るか）

「百合、今日は暇なんだろう？」

それじゃ今日、学校へ来てみないか？」

ここへ来るあたり、そういった百合が退屈しない為のプランはあれこれと考へてはみたものの、あまりいいものは浮かばなかった。

それもそのはずか、真とて女の子の日常というものには、身近にいたとしても疎いもの。

そしてその最大の原因となっているのが、百合が女の子の生活として真つ先に思いつくであろう、ファッションや買い物、恋愛ものの雑誌に興味がなかったということ。

ブラジャーやパンツを穿くことすら抵抗感があり（外出の際は必ず身に付けさせている）、服も白か黒の単色というあまり柄に拘りも無い様子であったりで、真には百合に対して、一体何をしてやれば退屈を凌げるのか、素もぐりの手探り状態なのだ。

友達の一人でも出来れば、違うのではないかと考えたが、本人は頑なに断っている。

「嫌、兄さんは私に学校へ行つて欲しいみたいだけれどっ、あまり私はそういう場所が好きじゃないの!」

「じゃあこのまま退屈な日々でもいいのか?」

「うっ……それは、嫌だけど」

嫌だけど、退屈なのは嫌という百合に対して何かしてやれることはないのかというのはしばしば考えることである。

一回だけ、「学校を休んで一緒にいるか?」と言ったことがある。その答えは、「それは駄目! 迷惑かけてまで一緒にいるなら退屈でもいい!」と言う。

実際のところはさして迷惑でも何でもないのだが、本当に滅多に怒らない百合が怒るのだ、それは嫌なことの一つなのだろうと思っている。

「それじゃあ、ごうしよう。」

今日のお昼を届けてはくれないか、それだけでも退屈にはならないだろう?」

「嫌」

「これは兄としてのお願いだ、一度だけでもいい……来てくれないか?」

「……………」

「頼むよ、百合の出来立ての弁当、食べたいんだ」

「……………」そんな言い方ずるいよ、兄さん。

分かった、気が向いたら行くから、来なかつたら自分で買って?」

「ありがとうな百合、俺は買わないよ、百合が美味しい弁当を持って来てくれるからな」

そういつて頭を撫でてやると、顔を俯きながらこくりと頷いた百合を見て、何故だか気分が良かった。

「——ということがありまして、もしかしたら妹が学校に来るかも

しれないのですが」

朝のこともあり、百合が来るならば学校が混乱しかぬない事態になると予想した上で、事前に報告する為に校長室へとやってきていた。

本当は人魔学校へと来て、一週間ということまで定期連絡の為に来たのだが、真の本題はほぼそちらの方である。

「ほほう、それは良き事かな、大勢の子供は学校で社会という大切なものを覚えるからね。

……だが、いいのかな？ 妹君いもぢいくんはあまり体が強いとは言えないのだろうか？

ここへ来るのにも一苦労ではないのかい？」

「いえ、妹は良く買い物に行ってくれているので、大した労力にはならないはずです。

その分、ここへ来た時には十分に休ませてから帰らせるつもりです」無理さえしなければ、百合は生活を恙無く送ることが出来る。

ただ、学校へ来るのなら急激な生活環境の変化を覚悟しなければならぬため、あまり強く勧めることは出来ない。

「了解したよ、職員にはそのつもりで話をしておく。

ただ生徒の方は君がフォローしてくれると助かる……何せ、あの容姿では目立ち過ぎる」

「心得ています……それでは本日の本題へ」

魔法は一般社会へと馴染むことが出来るか、その他には魔法を持つ者と持たない者が共存出来る社会でなければならぬ。

校長の「うむ、頼むよ」という言葉を聞いて話を再開させる。

「まず、生徒達の魔法への認識が重要と考えます……先日の一件はお聞きになられましたか？」

「聞いているよ、君のお陰で幸いにも教室への被害が出なかったと聞いている」

どうやらミラの魔法爆発事件のことは周知の事実だが、問題はそちらより真が教室への被害を抑えたという風に出回っているようだ。

「それでなんですが、ミラが……エクセリーズさんが魔法を暴発させた時、教室の生徒達はおるか、教師までもが魔法での防御壁を張るといふのを見まして、魔法が既に人としての生活の一端として入り込んでしまっていることは否めません。それは一般人と決定的に異なります」

これで全てという訳ではないが、それは校長も承知していることである。

今更魔法を使うのを控えるというのは、魔法学校としての存在に矛盾してしまっているのも懸念の一つ。

「それで真君は、それについてどう考える？」

「危険な兆候であると考えます。」

魔法と科学にはあり方として、似たようなものありますから」

「それは？」

「便利すぎると人間が動かなくなるということ、それと犯罪が容易になることです」

校長は嘆息して言う。

「やはりか……身体能力の低下、近代の人間に挙げられる問題の一つだね。」

それと犯罪か、それは実を言うと考えたことがなかったね……所詮、私も魔法社会に生きた一人の人間ということかな」

「いえ、校長は一つ新しいことを知りました……問題は、それをどう解決するかです」

正解の方程式へと辿り着く道のりは決して優しいものではないが、それでも気づいたということはそれから連想される事柄もまた一つ増えたということでもある。

「ははは、君みたいな若者に教えられてしまうとはね……いや、失礼だった。」

どうやら無意識に内に私は君を格下として見てしまっていたようだ、素直に詫びさせてもらおう」

自分の非を素直に認める、それは年を追うにつれて段々と難しく

なる。

高齢にしてこの人格、真は校長に対して素直に尊敬の念を抱いた。「いいんです、実際に俺は貴方より格としては下にいるでしょうから……しかし、この魔法に対しての考えは格下か格下でないかというの関係ありませんから、お互い腹を割って話していきましょう」「うむ……うむ、そうだな。

よし、時間も長くなってしまったようだし、この件についてはまた次回に持ち越しということにしよう。

妹君のことはしっかりと伝えておくから心配しないでくれ」

「ええ、ありがとうございます」

校長との話し合いを終了させ、時計の方を見ると時刻は一時限目の開始時刻まであと少ししかなかった。

真は少し行動を早めながら、「失礼しました」と言って退室した。

それは、何気ない一言から始まった。

四時間目が始まる前のこと、真は何気なくいつものメンバーになりつつある竜也、ティア、竜胆と一緒にいると、突然横から何かか飛んできたのだ。

それは偶々空いていた窓から颯爽として去っていったが、何か紙を丸めたものだった。

資源は大切にしよう、と真の心にもないことが浮かんくる。

会話としては、あまり味気のないことばかりで、覚えているのは一時間目の魔方陣の授業どうだった？とかそういった魔法学校ならではの独特の会話であった。

魔方陣から連想して、魔法ということですからすっかり忘れていたが、編入当日からこれまで、ミラからは何も接触がなかったということを真は思い出した。

ミラの魔法爆発事件（多数ある）が起きたのが、三日前のこと。

それからこれまでの間、ミラからの接触はおろか、視線すら感じることがない（何かこちらを気にしている素振りは見かけたことがあるが）。

編入当日のこともあり、真から話かけるのは何だか気が引ける思いであったので放置していたのだが、今日、ついにあちらの方が我慢がなくなってきたようである。

端的に何があったかと言うと、真はミラからまた連想して、これまた編入当日に竜也が「お前凄えな！」の発言の意味がどうしても気になったのでミラの話へと転換してのだが、

「あんだ今、私のこと馬鹿にしたでしょ！」
ということになってしまったのだ。

何だかもう、真的にはミラに構うと碌でもないことが起こりそうな気がしてならないので、無視することにした。

「それで竜也、あの時はどうしてあんなことを言ったんだ？」

そもそも何故怒られているのか分からないのだから、無視するには十分な判断材料と言える。

「ちょっと無視しないでよ！」

「……真、お前は本当に凄えな」

「だから、その凄いつていう意味を俺は知りたいんだが」

「だから私を無視すんな、こら！」

「竜也、そろそろ教えてくれないんじゃないのか？」

瞬間、頭の上を誰かの腕が通るがすつと前に倒れて避ける。

「つつてもなあ……もうすぐ四時限目始まるからぱっぱと話すぜ？」

「宜しく頼む」

今度は胸を狙った突きを、半身の状態で避け、その後上段蹴りをしてくるのを軽く屈んでかわす。

視線はそのまま竜也に向け、自らにお襲い掛かる脅威は一切合切無視することにする。

「簡単に言うと、そのミラ＝エクセリーズは大富豪の娘さんでな、はつきり言つと近寄り難い雰囲気も併せ持っているせいか、そいつ

に近づく奴は少ない、だからそいつに対して文句だったり、馬鹿にしたりする奴も勿論少ないんだ」

「つまり、ぼっちか？」

「ぼっち言うなあ！」

あと私を無視するぬあああああああああああああ！！」

「そういうこと、俺が凄いと思ったのは、そいつに対して初対面？から馬鹿にしたことだな……容姿とか」

その答えを聞いて思う、確かにミラという少女はただでさえ編入当日につっかかってくる危ない性格をしているのだ、クラスの連中からしてみれば危険人物と同列に位置する訳だ。

更に魔法の暴発、どこぞの大富豪の娘ともなれば扱いにくく、近寄り難い人間の出来上がりというわけになる。

「……ふむ」

そこで、ミラが続けざまに放っていた拳を止める。

ぱしっ、といい音が教室に響く。

「なっ!？」

驚愕した顔で、顔を真っ赤にしているミラ、だが今はそんなことを気にしている場合ではない。

「ミラよ、お前は友達が欲しいか？」

「っ意味分かんないんだすけどっ、てか手を離しなさいよおっ！」

ミラは真の手を掴んで離そうとするが一向に離れることはなく、蹴りの反動で抜け出そうとするがそれらは全て避けてしまっている。避ける理由はないが、新しい制服を簡単に汚すつもりもない。

「やれやれ、離したらまた暴れるだろうに……ほれ」

潔く離してやると、そのまま勢い良く後ろへ飛んで行く、そのままだと教室の外へ行きかねないので一応一言言っておく。

「ミラ、もうすぐ四時限目が始まる、すぐに帰って来いよ」

「うっさい！」

そう言って去って行くミラを見届けて、後ろを向くと呆れた顔でいる竜也と笑いを堪えきれずにいるティアが爆笑していた。

――結果として、四時限目が始まる直前にミラは律儀にも戻って来ていた。

四時限目が終わると同時に、一人の少女が教室を飛び出していった。理由は至極単純なもので、単に一人の少年と顔を合わせずらいからだ。

（何なのよ、一体あいつは！）

『友達が欲しいか？』、そう言った一人の男の姿を思い出し、ミラ「エクセリーズは腹が立つよりも混乱の方が頭の中を占領してしまっていた。

確かに、友達と呼べる人はミラにはそうそういなかった。

その原因も自分では分かっているつもりで、でもそれを直そうと思ったことはなかった。

他人に合わせるのに、自分を変えるのなんておかしい、そう幼いながらにして思った彼女はいつも一人だった。

（だったら、友達でもくれるって言うの……！？）

友達とあげる、くれる、もらうなどそういったものではないとは知っている。

だが、知っているだけだった。

友達など碌にいないミラにとって、真のお友達発言はそれほどまでに心の中まで浸透していたのだ。

だが彼女にも意地がある。

「お友達になってあげましょうか？」「うん！」

などという生ぬるいお友達など信じるに足らないと思っているから、ミラはいつもまでも「お友達」を作れないということを自覚していた。

ただ単に「お友達になって？」というだけで恐らく万人は「うん」

ではなく、「分かりました」と言うだろう。

ミラという少女は、それはお友達ではなく、ただ立場を鑑みた上で大人な対応だということを理解している。

更に、加えてミラは決定的な欠陥を持っているということも知っている。

魔法を使おうとすると、”つい”ではなく”どうしても”魔力が多めに注がれてしまうという欠陥、欠点。

魔法使いとしては本当にどうしようもない出来損ない、ただのマジツチの棒程度の火すら操れない魔法使い。

それも、真は知っているはずだった。

だから、真という少年には疑問を抱いて仕方がなかった。

自らの素性を知ってなお、自らの欠陥を知ってなお、あの態度、あの対応。

理解が、出来なかった。

(けどあいつが本当にあの人なら……え?)

ミラは欠点と同時に利点もあるということを自覚している。

それは、魔力そのものを目で視れるということ。

その量、質、色などの魔力に関しての情報をその目で視て捉えることが出来るということ。

それは彼女自身、親を含めた誰にも話していない、ただ唯一の長所だと思っている。

その彼女が、生まれて初めて目にした違和感、それは彼女自身を確実に恐怖へと誘っていく。

(何、あの魔力保有量、そして質、色……あの人、絶対に人間じゃない!?)

これまで”強い”魔法使いのものは色々と見てきたが、それは初めて目にした”目に見える死”そのものだった。

幸い、その人物はこちらが見ていることに気づいていないのかそのまま歩いていく。

(あの方向、私の教室……だよね、どう……しよう)

足が竦んでなかなか動かない、気付けば額や脇には冷や汗が、奥歯はガチガチと音を鳴らし、足は重力を忘れたように感覚が薄れていた。

得たいの知れない恐怖、これまでにない非日常。

そして自分と同じ多大なる魔力保有量の持ち主。

その人物に、ミラは自然と興味を持ち始めていた、否、最初に見た時から持ってしまったのかもしれない。

その自覚がないままに、ミラはつり上がっている唇を引き締めて、教室へ向かっていた。

約束——とまではいつていないが、そろそろ時間だということ、真はいつも通りのメンバーと共に席へ着いていた。

食事をする場所はいつも中庭なのだが、今はまだ本日のメインヒロインが来ていない。

「ねえ、真君の言う待ち人って誰なのよ？」

一時限目が始まる前から、今日の昼食は一人追加だという話はある、それをティアは聞いている。

「そうですよ、神代くんってば私達に何も教えてくれないんですから……」

ティアの隣では竜胆がぶりぶりあつちと怒りを露あつちにしている。

先に中庭に行ってもらうか、と考え始めていたところに、真の待ち人は現れた。

その瞬間に教室はしーんと静まり返る、まるで雫がひとつ、水面に落ちるのを今か今かと待ちわびている風情だ。

そして、その雫は落とされた。

その雫——ではなく百合は真の傍まで来ると「はい、これ」と言っ

ていつも通りに弁当を渡す。
それに対して礼を言って、このまま教室にいるのはまずいと考え

て竜也達に中庭に行く旨を伝える。

だが、竜也達も百合を見つめたまま動かない、口はポカーンと開けたままで夢遊病患者のように覚束ない足取りでいる。

「さて、まずは紹介しよう、妹の百合だ」

真が掌てのひらを百合へ向け、視線は竜也達に向けて話す、その隣では百合で優雅にお辞儀をしていた。

これは、百合自身がしたいのではなく、真の体面を気にしてのことだということ、真は知っている。

紹介を終え、三人の各々の反応を待っていると、最初に動いたのはティアだった。

「きゃー！ 可愛い可愛い何コレ超可愛い！」

可愛い発言を三連発して興奮するティア、そのまま百合対して抱きつこうとするが、頭を抑えて止めさせる。

「こら、初対面の相手に対して何をする」

その気持ちは分からないでもないが、何よりそれを止めないと百合の機嫌が悪くなるのだ。

そして今夜は何をされるか分からない、故に真は極力百合の機嫌を損ねないようにしつつ、且つ楽しめるように話をしていることを考えていた。

そしてそんな思惑を知らないティアは、渋々体を引きながらも、まだ体は前のめり気味である。

対して百合は知らん顔で持つて来ていた水筒でお茶をすすっているが。

「えと、神代君の妹さんですよね……私は竜胆菜です、宜しくお願ひします」

竜胆がそう言いながら、照れながらも手を出すと百合は珍しく（珍しく）手を握り返した。

「神代百合です。こちらこそ、兄さんがお世話になっています」

「私はコンスタンティア＝ルビー、宜しく」

「靈童子竜也、宜しくな」

順々に握手していく中、真はその様子を凄く以外そんな顔を見ていた。

顔こそ確かには笑っていないものの、確かな交流を図った、それは真にとつて驚くべき事実である。

が、生憎とそのままという訳にもいかない、一通りの紹介を終えて、百合の持ってきた弁当を広げると中にはまだ作ってから三十分も経っていないだろう熱々の白米とおかずが入っていた。

それを、竜也達は「おお」と言いながら覗く。

「これ、百合ちゃんが作ったの？」

「はい、こうなることは予想していたので兄さんのお弁当は増量してあります」

それだけ言うと、百合は自分の弁当を食べ始める。

一方、ティアは予想していなかった答えなのか、それとも自分が言う前に聞きたいことを言われたからか真の弁当と百合を交互に見ている。

「えっと、食べてもいいってことだよな？」

「そうだろうな……お前達は運がいい」

「何がですか？」

「百合の手料理を、熱いまま食べられるということをだ」

竜胆の問いに、真は簡潔に答える。

二人は目を見合わせて、ひょいっと弁当に伸ばしておかずを自らの口へ持っていく。

その瞬間、二人が目を大きく開いて手を口に当てている。

「何これ、旨……」

「ですよね……何だか、自信失くしちゃいます、私もお料理は得意な方だと思っていたのですが」

がっかりする二人、だが竜胆が料理を出来るということは初めて知った。

「それなら竜胆も今度作って来てくれないか？」

「えっ、でも……」

「まあ、一回だけならいいんじゃない、栞？」

「あ、俺のも頼むぜー、最近出費が激しくてさー」

「誰があんたなんか栞の弁当食わせるもんですか！

猿はバナナでも食ってないさいよ！」

「んだとテメエコラ！」

竜也とティアがこうなると、しばらく放って置かないと静まらない為、放置。

改めて竜胆の方へ向くと、苦笑いしていた。

「では、今度機会があつたら……わっ！」

「なんっ、んぐっ……何をする、百合」

竜胆の話を聞いていると、突然箸が口の中へ侵入してきた。

中でウインナーが歯に磨り潰され、喉を通っていく。

「兄さん、私の弁当飽きたの？」

何故、そんな扇情的な顔で見やるのか子一時間程問い詰めたい衝動に真は駆られた。

「そんなことは、もがっ……」

「兄さんのお弁当を作るのは私の役目……ふふっ、それとも毎日トリニダード・スコープオン・ブッチー（世界一辛い唐辛子）が入った真っ赤なお弁当がいいの？」

「たまたま見ていた雑誌が同じだったのか、真もその名は知っている。」

「それは勘弁、と言う訳なんだ……竜胆さん、悪いけどそれはまたの機会にははくれないか？」

竜胆には悪いが、流石に食と引き換えに命は懸けられない。

「ふふっ、それはいいんですけど……百合さんはお兄さんのことが大好きなんですね」

そして竜胆は百合の素顔の一面を垣間見て、何故かそれを嬉しがっているように見える。

「そんなことはない」と兄さん、いつも通りでいいならそうしてあ

げる「……凄く仲良しだ！」

家でされていることを、ここでされたら一躍俺は妹と変なことをしている変態お兄さんに早変わりしてしまう。

最も、そうなったところで百合は全く気にしないのだが。

百合がやっど話せる人がいるというのに、その傍に真自身がいるとどうやら色々と危ないことが起こってしまうらしい。

「さっ、それはそうと神代君……そろそろお弁当を食べないと時間が無くなってしまいますよ？」

「ああ、そうだな……って百合、何をしている？」

「私は食べ終わったし、兄さんに食べさせてあげようかと思っていつの間に、と思っているとそんな考えを遮るようにどんどんと口に運ばれてくる。

それを羨ましそうに見ている竜胆、そして休み時間終了間際になつてようやく喧嘩をやめた二人はがつつくように弁当を食べていた。

「「ごほおっ!?!」「」

今日の正午の教訓、食事をする時は焦らずゆっくりと食べようということだ。

――そして真は、休み時間の終了のチャイムと共に去って行く人影を黙って見ていた。

四話 マジック・ロジック 前編（後書き）

第一話以外は、大体一話10・000字を越えるように心懸ける作者です。

それはそうと、最近足が冷えてきているのでスリッパ履くのを欠かせない毎日です、辛いですが頑張っていきますよ、ええ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3144z/>

Deus Ex Machina

2011年12月18日04時45分発行